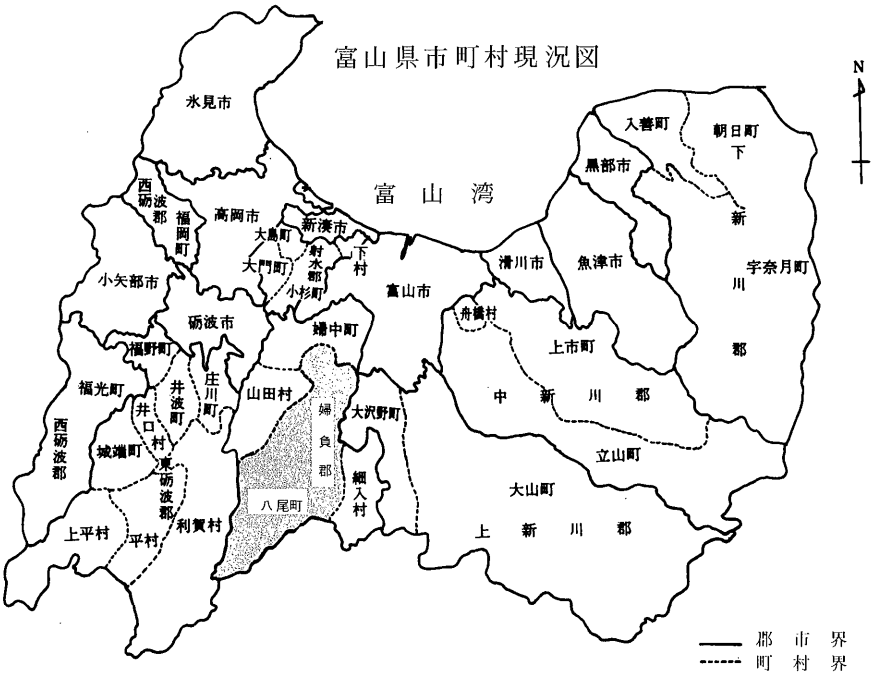
伝承民謡を育てた風土と農民暦
（八尾町と越中おわら節）

八尾町農業協同組合　副組合長理事
八尾町文化協会　理事長
宮　本　壽　夫

1．はじめに

日本全国に民謡のふるさとと呼ばれる所が各所にある。東北地方がそれであり，九州や沖縄にも秀れた民謡が多く伝承されている。越中と呼ばれる富山県も民謡の数と質では他県に遅れを取らない。多くのすぐれた民謡は労働の哀歌を歌い上げ歌い続けたものである。古くから農業を生業として営んできた富山の風土には当然として農にかかわる民謡が数多くあり，季節に関わる歌詞も多い。

八尾町位置図



2．八尾町での農業の年中行事

（1）若木と若水

若木は大みそかに，近くの山で樵（きこ）り，束ねて，元日の囲炉裏で用いた。若水は元日の早朝，井戸や湧水から汲み上げて雑煮などの煮炊きに用いた。若木の焚き火にあたり，若水で煮炊きした物を食べると何時迄も若さが保たれると言い伝えられた。

元旦に鶴（釣る）の声するあの井戸の音
亀（瓶）に汲みこむオワラ若の水
（おわら歌詞）

（2）仕事始め

一月二日の朝は仕事始めとして農家の男たちは藁を打ち縄をない，草履や草鞋を作って仕事始めとした。勤勉が尊ばれたころの厳しくも懐かしい風習である。

（3）七草粥

セリ，ナズナ，ゴギョウ，ハコベ，ホトケノザ，スズナ（かぶ）スズシロ（大根）が春の七草と言われたが，積雪の多い八尾の里では越冬野菜の大根や蕪や白菜などを一月七日の朝，細かく刻み餅と米を入れて炊いて，一年の健康を祈願して食べた。

（4）田植え正月（小豆粥）

一月十五日は鏡餅を焼いて小豆粥の中にいれ豊年を祈った。その時八尾ではくず米を挽いた粉で作った団子を一緒に炊いて食べた。稲株が大きくなるとげんをかついで，団子は大きめに作った。また「ぬるでの木」で箸を作り稲穂になぞらえて花箸に仕上げて団子を食べた。

（5）初午

二月初めの午の日を初午といい養蚕が盛んであった八尾ではマユの形の団子を作り，蚕の神に供えて良いマユが取れることを祈った。

（6）彼岸中日

春と秋の彼岸の中日（春分の日，秋分の日）は地獄の釜も休みの日と称して，農家はどんなに忙

しくても仕事を休み先祖の霊を祀った。

（7）春祭

春祭は村に病気や災難がないように，また秋の豊作を祈って多くの集落では獅子舞を奉納して祈った。

（8）五月（さつき）

早苗を田に植える月だから早月と呼ぶといわれるが，ほかにも皐月，妬月，悪月，田苗月，稲苗月とさまざまな名称をもつ。「秋と五月と二度さえなけりや憎い嫁など何で貰お」と俚謡にあるが，角のない牛として専ら労働力として娶られた農家の嫁の哀れさも残る呼称でもある田植月。

（9）田祭り

作業の全てが機械化された今日の農業は田植えの最盛期はゴールデンウイークと，一ヶ月も早くなったが，牛馬で耕し，全てを人手で植えた頃は田植えの終るのは六月上旬であった。田祭りは「やすごと」とも呼び，餅（笹餅やぼた餅）を搗き，御馳走を作って一日を家族そろってくつろいだ。

（10）養蚕

八尾町の山手の農家ではほとんどの家で蚕を養った。収穫期により夏蚕・秋蚕と呼んだ。このほか晩秋の楮の刈り取りから始まり三冬をかけて漉く和紙つくりや，同じく稲の取り入れが終ると同時に始まる薪炭生産も山間部に住む人達にとって辛いが生活の代を得るための大切な作業であった。

（11）地蔵祭

八尾町では八月六，七日に催される聖徳太子の太子伝（太子様祭り）と平行して行われ，町や村の石地蔵や地蔵堂の前に小屋形の台を作り，子供らが中心になって提灯をつけ，種々の飾りを施し，菓子や果物を供え，通りかかる人々は「御焼香願います」と鐘を叩いて張り上げる子供たちの声に応えて浄財を寄進した。僧侶が来てお経を上げて帰り，終ってから子供達は供え物を配分して，楽しみを分かち合うのであった。

（12）盆踊り

八尾町でのお盆休みは八月の十四，十五，十六日のいわゆる旧盆であった。この日には他家へ嫁いでいる娘たちや，他県で働く子弟が帰省して久しぶりに母親の手料理を食べて文字通り水入らずの時間をすごした。また夜は神社や寺の境内，或いは小学校の運動場などで踊りの舞台が立ち，会場ごとに特色ある民謡で踊りあかし，若者たちの良き社交場となった。

写真1．街流し風景

（13）風の盆

台風が襲来し古来厄日とされて来たいわゆる二百十日（九月一日，立春から数えて二百十日目となるのでこのように呼ぶ）から三日三晩八尾の町を上げて踊りあかす風の盆の起因は，今を去る三百六十四年前の寛永十三年に加賀藩主前田利常の許可を得て開町した八尾町建の書類が，その後わけ有って町外に持ち去られ，六十六年後の元禄十五年，町の役人衆が奇計をもって取り戻したことを祝い，三日三晩，町民が町内をおもしろおかしく踊り練り回った。これが発端となり太鼓，三味線，胡弓を奏で唄い手，囃子方と手拍子で調子をとって踊りにぎわい，やがて富山藩がお盆三日間の町流しを許可した。当初は現在のおわら節のほか，おきんさ（越後おけさのなまり）松坂節，糸引き節，浄瑠璃，常盤津などもまじえて歌いあるき踊りあるいた。

写真2．おわら演奏風景

左端（胡弓）　左2番目（囃子方）　中（女性三人）唄い手　右端（三味線）

※〈胡弓の解釈〉
広義には，東洋のリュート属の擦弦楽器の総称。
民謡で胡弓を使うのは越中おわら節の他には「麦屋節」しかみられず。
明治末に松本勘玄により導入された

写真3．約百年前のおわらの女踊り

身なりは男女とも編笠をかぶり男子はおもに布法衣を着ていたといわれる。女子は山繭ちりめんなどの派手な浴衣を着，その上に絹織の袖無しや半纏をまとい，足に白足袋，手に赤絵の扇子を持って踊った。やがて明治六年ころから新暦採用を期に，お盆三日間の踊りは現在のように九月一日から三日までの「風の盆」に踊られることとなった。

当時，おわら節の同好者はたびたび「遊び宿」に集まり，町には百丁を超える三味線があり，三味線をひけぬものは一人もいないとまで言われた。

風の盆が近づくと富山の丹波屋，針田屋など二十人余の皮張り職人が，会場となる聞名寺の付近に宿をとって，毎日のように皮を張り替えた。

職人らは，三味線を鳴らしてみて，音色が悪いとただちにバチで破り，張り直した。三味線は猫の皮が最良とされ，妙手のものはこれを張ったが，今は猫の皮が払底して，多くは犬の皮である。

当時のおわら節は三拍子であり，婦女子などの糸引き唄として，右手に釜中に煮た繭糸を引き，左手でわくを回しながらの作業唄でもあった。

この風景は坂の町八尾では昭和の初期までみられ，現在も歌い継がれているおわらの歌詞に残っている。

(14) 稲刈り

曾ては台風の訪れる前に収穫を終えようとして，富山は早稲の作付けが多かった。八尾町もその例に漏れず八月末から九月初めが稲刈りの最盛期であった。良質米指向が強くなった今日，水稲の作付けの大半は銘柄米のコシヒカリとなったが，機械化の進歩により植付け期が大幅に早まり，九月中旬には稲刈りは峠を越す。稲刈りが手作業の頃は，乾燥も天日乾燥のみで天候の良い時の地干しと稲架干しがあった。現在はコンバインで，刈り取り即脱穀で籾となり，火力乾燥機の場合は翌日すでに玄米となって出荷される。

(15) 秋祭り

農作業が機械化されない時代の秋祭りは，八尾町では早稲の取り入れ直前もしくは初期に行われた。然し最近では収穫を完了して心身ともにくつろぐ十月におこなわれる集落が多い。春，秋共に親類や嫁いだ娘や孫まで呼んで，互いに馳走したものであったが，近年は氏神様での神主の儀式が終るとあとは家族だけのいわゆる内輪祭りとなり，それも少子高齢化の昨今，名ばかりの寂しい祭りとなった。

3．越中おわら節

越中おわら節の起こりを論ずるとき常に語られるのが八尾町建ての書類取り戻しの史実である。

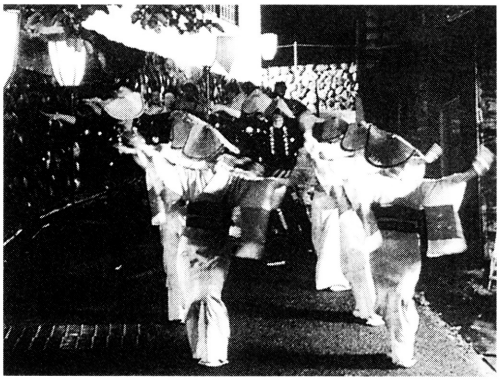
この町建ての秘文書は，貂の皮に包んで，皮包みの止めを鷹の爪で止めるように作ってあったものだろうと想像される。後世「貂の皮」とか「鷹の爪」と呼称する重用書類包みの別称が伝声している所以である。そしてこの「貂の皮」は瀬戸屋，葛原屋，吉友屋，紺屋の四家を四年に一年，毎年持ち回り，もし此れを披見したときは，天罰が下ってそのものの家が潰れるか，大きな不幸があると口伝されていた。

写真4．かかし踊り（男踊り）

写真5．四季踊り（女踊り）

※　「八尾史談」によると，元禄の頃より，川崎音頭から町内練り歩きへ変化して伝えられていました。大正9年，「おわら節研究会」と松永由太郎，江尻せきが，稲刈りや宙返りなどの所作をとりいれ，「豊年踊り(旧踊り)」の改良をしました。さらに，昭和4年若柳吉三郎が，春夏秋冬の所作をとりいれた「四季踊り(女踊り)」と，「かかし踊り(男踊り)」を振り付けし，現在の形になりました。
　隊列を組んで練りまわるスタイルには，風の神をもてなし送る意味があったといわれています。

写真6．街流し風景

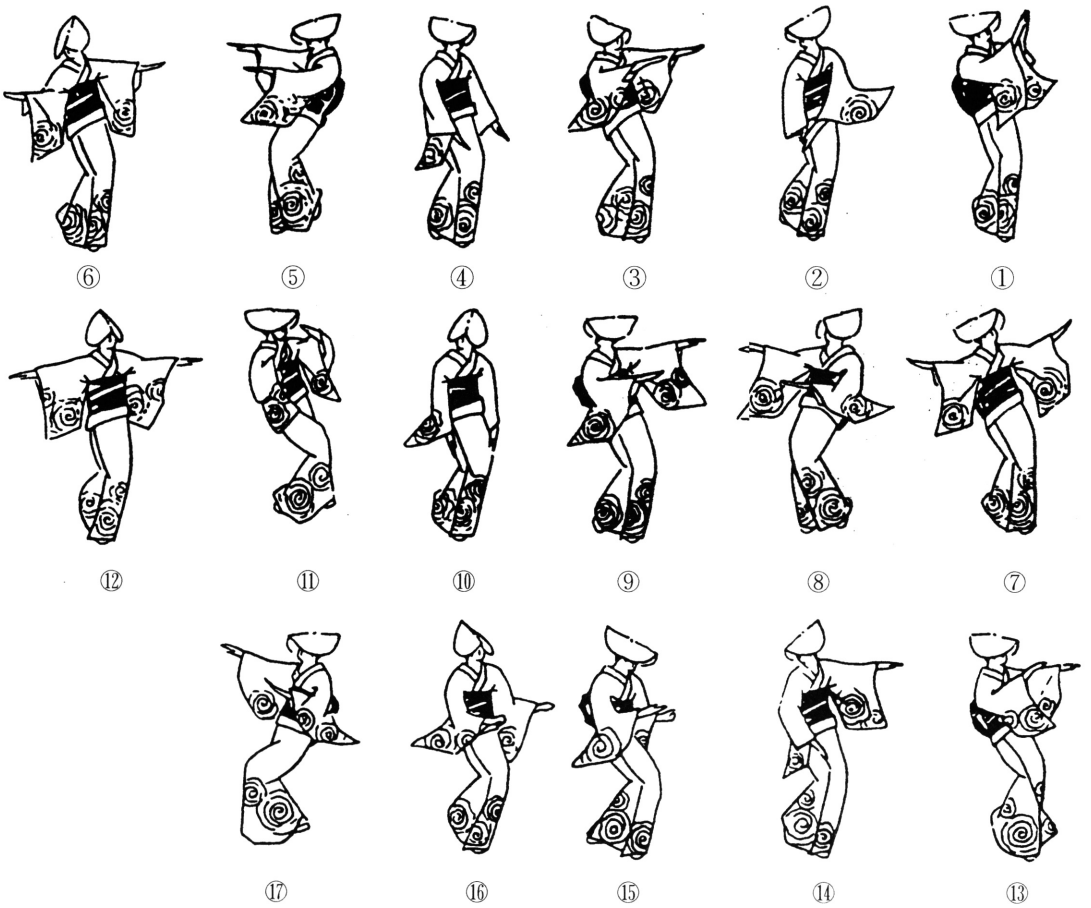


　廻り盆は前述のように，元禄十五年に始まり，爾来絶えず行われて来た。昭和以前で最も全盛を極めたのは，天保年間から明治初年頃までといわれ，それらは大抵男女混淆(こう)であり，女子は数人一緒に声を揃えて唄い，男子はそれぞれ三味線，太鼓，胡弓，手拍子などでその唄に和し，どんな家庭の婦女子でも盆三日間だけは踊り廻ることをゆるされていた。

　元禄に始まる八尾の廻り盆は年を経るにしたがい隆盛を極めたが，唄う謡は十人十色で様々のものがあり，誠に聞き苦しい点もあった。のち文化九年の秋，遊芸の達人とも云われた宮腰屋半四郎茶屋新助，石戸屋源右衛門らが申し合わせ，いまのおわら節を新作したと伝えられる。そのとき様々の滑稽な変装をして，新作の歌を謡いながら町内を練り廻り，おわらいという語を歌中にさしはさんだので，おわら節というとも伝える。くだって嘉永及び安政の頃からいつしかおわらと謡うようになったと云うが，小原と云う地名に関わるとも云い，豊年万作の大藁節の省略とも云い諸説があってさだかではないが，今やおわらはその名称の起因を論ずるよりも，草深く，雪深い八尾に生まれ，ここに営んだ祖(おや)たちが，風の声，水の音，土の声，そして鳥の声，虫の声のなかから歌い上げ，限りない歴史の中を切磋琢磨して生き残ったひとつの調べ。生活の苦楽，愛の悲喜，風雪に耐える厳しさと美しさ，そのあらゆる情感をためらいなく，唄う自由の讃歌。明日への希望に生きる勇気の歌。誇張と慢心を抑制して，素朴に唄い継ぎ舞い次ぐ博愛に満ちた仁の歌。おわら節の起源の不明こそ，その永い伝統を物語るものであり，

写真7

図2．稲刈り踊り図



稲刈り…

（下の句についた踊り①から⑩までこの通り⑩と⑪の間にこの踊りが七呼間と投げる形が入る）即ち、⑩でとんとつけた左足を更に半歩前に出すと同時に左手は稲を持つ動作で左前に持ってきて一、右足を前に半歩出して二、三で右手右前方に出し四と左手下に稲を刈りこむ五でその右手を稲を持った左手の上にさしこみ、六でそのまま手前に引いて左手首を一廻りして七で両手を軽くにぎって左右に結ぶ、それとんと右足右方にふみ出して稲を投げる形をなし⑪へつづき⑫ときまる。

今日より明日へと静かに深く大衆のこころの底に育まれながら変り行く未来に対しても不明の歌。八尾に生まれ育ったおわら節はこれからも越中に育ち全国の人々に愛され世界に調べを育てられて永遠に生きて行くであろう。

4．農の営みから芽生えたおわら歌詞

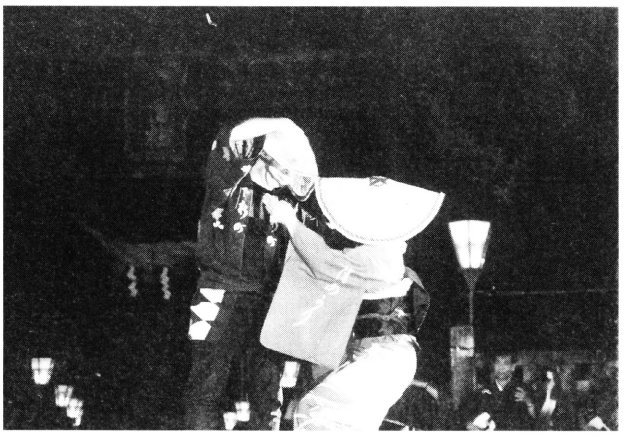
春の歌

来たる春風氷が解けるうれしや気ままにオワラ開く梅

おらっちゃ小さい時ァ菜種の花よ盛り過ぎればオワラチラバラと

紅だすき田植しようとて水田に立てば可愛い燕がオワラ行き戻り

写真8．おわら相聞（そうもん）



夏の歌

春蚕　夏蚕も揃うて良うて盆が待たれるあねいもうと

汗の野良着をゆかたに着替え嫁も踊りのオワラ輪に交じる

そっと打たんせおわらの太鼓　米も成る木のオワラ花が散る

秋の歌

山の畠に二人で蒔いたそばも花咲くオワラ風の盆

二百十日に風さえ吹かにゃ早稲の米食(く)てオワラ踊ります

虫の声やら砧(きぬた)のひびき里は月夜のオワラ芋の秋

冬の歌

八尾山の町　軒なみごとに大根吊るしてオワラ冬が来る

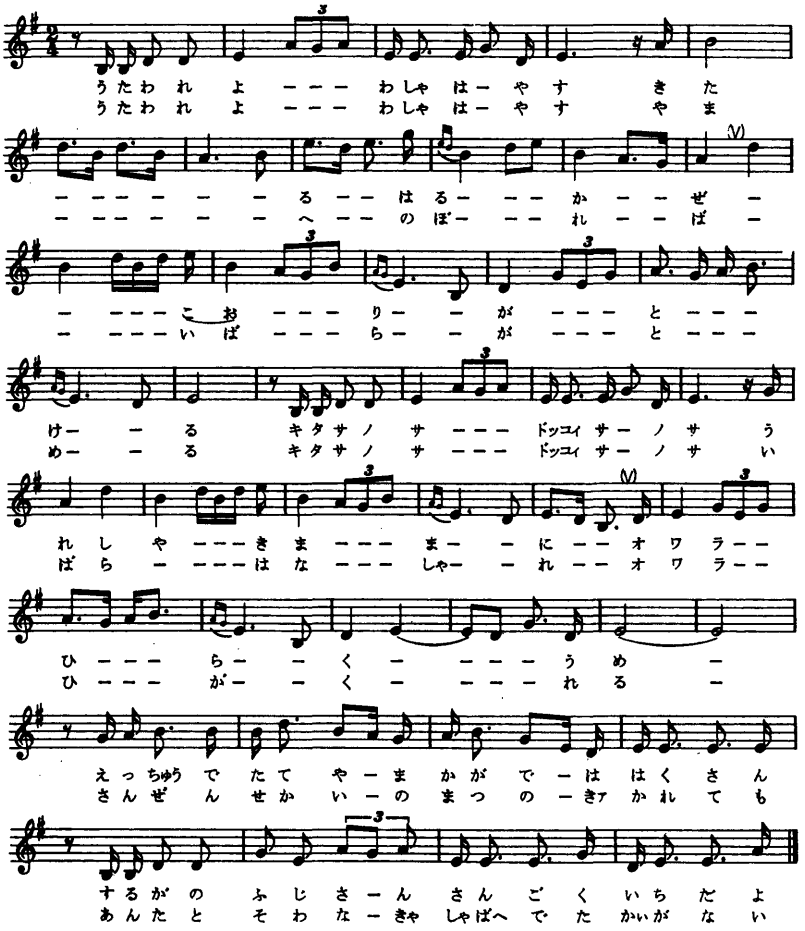
紙を漉こうか楮を煮よか白木牛嶽(しらきうしだけ)オワラ雪もよい

ほっとため息小枠を眺めこうも糸嵩(いとがき)オワラないものか

参　考　文　献

①八尾町史
②八尾町おわら資料館（展示資料）
③歳時記とやま
④富山県民謡採譜（著者黒坂富治）

写　真　提　供

①八尾町商工観光課
②村杉ビデオ工房
③林印刷所

越　中　お　わ　ら　節